

『地 と 図』 を 読 む

成 瀬 厚*

キーワード：写真，図と地，コンテキスト，二分法的認識，システム論

I はじめに

近年の人文地理学における景観・風景 landscape への関心のなかで、当然のことながら画像の解説という問題に注意が向けられている (Cosgrove and Daniels, 1988)。視覚的な画像としての景観は、個々の建築物から諸々の事物の総体としての都市に至るまでの物理的存在そのものの見えと、風景画や地図、写真などの再現された見えとに簡単に分けて考えることができよう。地理学において、後者のなかの写真を対象とした研究は意外と少ない。広告写真の分析を除けば、以下の四つのもが筆者の目に付いた限りである。まず、Taylor (1990) は写真をめぐる実践に焦点を当てる。Taylor は写真の普及と観光産業や交通手段の発達との関係において写真の利用の歴史を辿り、職業写真家や写真に関する団体の考察を通じ、写真理念と風景、ナショナリズムとの関係を論じている。Seamon (1990) は今世紀半ばの写真家、アンドレ・ケルテスのニューヨークの作品をハイデガー哲学と対比する形で人間と世界との関係を考察している。Davis (1992) は1930年から1990年にかけてのアメリカの写真家の作品を時代を追って検討することで、アメリカの文化景観を論じている。最後に、Cosgrove (1994) はアポロ17号から1972年に撮影された宇宙からの地球の写真进行分析する。そこでは、そうした写真が当時の合衆国における One-World, Whole-Earth といった世界主義的なイデオロギーとの関係でどの

ような役割を果たしてきたのかが、広い思想的・社会的・政治的コンテキストのなかで論証される。

筆者は既に、特定の写真テキストを対象とした研究を行った (成瀬, 1997)。しかし、上記の研究事例も筆者によるものも写真論一般についての記述はあまりない。本稿はそれを補う意味で、地理学との関連において写真論一般について記述したい。

そこで本稿では、議論の場として、地理学一般としての地理写真を提唱する石井 實氏の作品『地と図』(石井, 1989) をテキストとして用いる。そして、本稿の構成としては、写真一般論 (第II章) から『地と図』の分析 (第IV章) へと導かれるが、写真と地理学の狭間から引き出された『地と図』における作者の二分法的認識に関する考察が第III章として挿入されている。

II 地域を見ること、見せること

1) 写真論概観

写真についてはあまりにも多くのことが語られてきている。ここでそれらを詳しく繰り返すことはしないが、本章では、地理学を含めた社会調査における問題と我々の地理的認識に関わる問題を踏まえて、写真に関するいくつかの著作のなかの議論を概観してみたい。

写真という技術がもたらした帰結は何か。ベンヤミン (1970, p. 83) は最も影響力のある写真論のなかで、写真という複製技術は映像によって現実からアウラを吸い取ると語っている。ここで、アウラとは「空間と時間とが織りなす、ひとつの

* 東京都立大・院

特異な織りものであり、どんなに近くてもなおかつ遠い、一回限りの現象」と定義されている。一方、バージャー (1993, p. 68) によれば「写真は、一瞬に作り出される証拠として現実の世界に取って代わった」。しかし、写真、あるいはそれを含めたメディア一般が現実を偽造するわけではない。カメラができることは「事件の外観を定着する」(バージャー, 1993, p. 70) ことであり、「「写真」が数かぎりなく再現するのは、ただ一度しか起こらなかったことである」(バルト, 1985, p. 9)。我々の網膜においては、写真で定着されるべき瞬間の映像が次々と現れては消えて行く。写真は我々が次々と忘れ去っていくその瞬間の画像を一定期間保存する。

地域を数枚の写真で表現することを考えると、まず時間的にみて、同じアングルからの写真は1日に「24時間／露出時間」の枚数だけ撮影可能である。また、空間的にみても無数の可能なアングルから選択がなされていることになる¹⁾。すなわち、「見ることは選択」(バージャー, 1986, p. 10) であり、写真が定着した画像はいつでも我々の眼前に再現され、また、実際に撮影されなかった無数の可能な画像を代表するのである。

それでは、写真に定着された画像が複製され、流布されることは何を意味するのであろうか。ソントグ (1979, p. 10) は「写真を収集することは世界を収集することである。(中略) 写真を撮るということは、写真に撮られるものを自分のものにするということである。それは知識と思われるがゆえに力とも思える、世界との一定の關係に自分を置くことを意味する。」と主張する。現実そのものや地域や場所は所有することができないが、画像として、あるいは知識としては所有することが可能となる(ソントグ, 1979, p. 166)。かつて、油彩による風景画は、パトロンとしての地主が自らの土地を居間に飾れるような画像として所有するために描かれた(バージャー, 1986; ヴァルンケ, 1996)。複製技術としてのカメラはその画家の役割を拡張し、不特定多数の者が自らと関わりの薄い土地の風景を所有することを可能にした。小型化してからというもの、カメラは19世紀末の英国において自転車旅行に携帯されるようになり

(Taylor, 1990)、その後も世界的に観光旅行には欠かせないものとなっている。「われわれは見るためにではなく、写真を撮るために旅行する」(ブーアステイン, 1964, p. 128)。このような画像による所有は自ら撮影するものに限られない。絵ハガキ(佐藤, 1994)や切手(斎藤, 1992)など、こうした選択された画像を定着した媒体(メディア)は我々の地理的知識を規定する重要な要素となっている²⁾。

2) 写真をめぐる主体

写真をめぐる行為としては、バルト (1985, p. 16) の言葉を借りずとも「撮ること、撮られること、眺めること」が考えられる。行為主体としては撮影者、被写体、観客が存在する。

撮影者は時空間上の無数の画像のなかから選択を行うことは上に述べたが、写真術は数多くの被写体を画像として保存してきた。このことは、物理的な画像を生産可能にするのみならず、そのような画像を我々が見、あるいは見せることを道徳的に当たり前のこととするのに成功したといえる。フォト・ジャーナリストは世界を駆けめぐり、カメラを手にした観光客も溢れている。また写真は、それまでは不快な、あるいは見るに耐え難いとみなされてきた画像を氾濫させることで、我々をそれらに慣らすことに成功してきた(ソントグ, 1979, p. 48)。また一方では、「写真は美をいたるところに存在するものとして明らかにしてきた」(ソントグ, 1979, p. 109)。衝撃的なものをも公にすることが許され、美の対象ということであらゆるものが被写体であることが許され、バルト (1985, p. 145) がいうように「イメージが、普遍的なものとなることによって、差異のない(無関心な)世界をつくり出しているのである」。

写真撮影をめぐる、複数の主体の關係はまさに政治的である。「一台のカメラを所有することが(中略) 侵害の免許を与えるわけではない」(ソントグ, 1979, p. 174)。撮影される側は写真撮影という行為から無関係なわけではない。バルト (1985, p. 23) はカメラというものが四つの人格を創り出すと論じている。すなわち、①自分が

そうであると思っている人間、②人からそうであると思われたい人間、③写真家が被写体をそうであると思っている人間、④写真家はその技量を示すために利用する人間、の四つである。一枚の写真画像は、観賞者のことを念頭に置いた上で、バルトのいうような被写体の意識とその意識を被写体の外観から読み取る撮影者の共同作業によって創られたものであるのかもしれない。写真は観賞者に与えられる被写体に関する唯一の情報であることも稀でない。また、撮影された写真自体は商品として容易に撮影者の手を離れる。「公的な写真はその文脈から切り離されて死んだオブジェとなり、まさにその理由から、いかなる恣意的な使用にも手を貸すのである」(バージャー, 1993, p. 77)。

観賞者の側もこうした政治的な諸関係から逃れられない。なによりも、撮影者と被写体とが同じ時空間を共有しなければならない一方で、観賞者はそこから切り離されている。しかも多くの場合、観賞の場は自宅や図書館、美術館、本屋などの守られた空間である。そのような場での観賞行為は、「自分は災難から免れているという気持ちが痛ましい写真を見る興味をかきたて、それを見ることで自分は免れているという気持ちが湧きつのである」(ソントグ, 1979, p. 170)。さらにいえば、自分がその災難から免れているという一方で、その災難に苦しんでいる人々が存在するということに対する償いとして写真を見るのかもしれない。「同情は困っている隣人に対してほどよい距離を保つための手段なのだ」(ジジェク, 1996, p. 352)。

さらに、複数の写真がある意図を持って配列された写真展や写真集になると、それらはもう一つのテキストとしての意味を獲得する。特に、様々な地域から集められた写真によって構成された写真展や写真集はさながら博物館のようである(ソントグ, 1979, p. 116)。筆者による写真集の分析(成瀬, 1997)に即していえば、それらのテキストはさながら世界地誌のようである。

ここで、写真による地理的情報の提供はいかにして可能か、という問題を考えてみよう。一枚の写真に含まれる地理的情報としては、その地域に

固有な局地的特徴が考えられる。例えば、人々の肌の色や顔つき、服装といった居住者の特徴、建築様式や街路形態といった建造環境の特徴、そして天候(空の様子、雨、雪など)や植生、地表面の土壌、地形等の自然的特徴などが考えられよう。地図という表現形態と異なり、広範囲を一つの画像でカバーすることや地点を一つの平面上に位置づけることは不可能である。写真に記録されるローカルな情報は多くの場合、観賞者側にある程度の知識を要求する。写真展や写真集においては、それぞれの写真におけるローカルな情報の外見的差異が地理的な差異を喚起させる。一枚の写真はまさに地球上の一点を記録しているものであり、根本的に地理的な情報であることも事実である。

III 地と図、あるいは図と地

1) 『地と図』、そのタイトルの意義

地と図、このタイトルからは、作者の意図に沿うものであれ、そうでないものであれ、様々な意味を汲み取ることができる。まず、「地理写真が地理学の中で確固とした地位を占めることを願いながら」(石井, 1989, p. 173)とこの作品のあとがきを締めくくる作者にとって、地と図という強烈な印象を持つこのタイトルに込められた願いは何か。それは何よりも、地理学のなかで長い間確固とした地位を占めている映像媒体である「地図」への対抗意識である。作者はいかにして地図を地理写真に置き換えようとするのか。それは、地図という単語を構成する二つの漢字を分けること——地と図——によってである。これは Ó Tuathail (1994) がアフリカに従って、geography (地理学) をポスト構造主義的な意味で解きほぐすために、ハイフンによって geo-graphy と区切った方法と同じ意味を汲み取ることも可能である。「ハイフンは不確定の印である」(Ó Tuathail, 1994, p. 530)。地と図という区分けはゲシュタルト心理学の「図と地 figure-ground」³⁾を想起させる。形の認識において、我々はある図柄をそのものとして認識するのでなく、図柄を浮かび上がらせる素地の上に図柄が存在することで形の認識が可能になる。後に論じるが、明らかにこの作

品のタイトルにはこのような意味合いが含まれている。

ではまず、地図と写真の違いについて考察してみよう。地理学的な主張を含む地図は主題図のことであると思われるが、「図と地」の観点から主題図と地理写真の違いを検討してみよう。主題図においては、考察すべき現象が図柄となる。地理学的観点からそれらの現象は、地域的、ないし空間的關係によって説明される。その説明の素地となるのが地域的、空間的情報であり、それは点的、線的、面的情報を含む。主題図の場合、これらの図柄も図柄もともに地図作成者の判断によって、現実世界から選択、抽象、そして創造されたものである。それに対して地理写真の場合は、撮影者が意図的に画面に定着させようとしたもの、そして多くの場合ピントが合わされたものが図柄ということになる。その一方、地図とは異なり、写真はフレームに含まれる情報を加工なしに記録する。そのようにして、撮影者が意図せず記録した情報が素地になる。また、若林(1995, p. 40)が指摘するように、地図と写真には視点の違いがあり、「地図においては通常言う意味での「視点」なるものは存在しない」。一方、カメラはあらゆるものを撮影者の「時間や空間上の位置に関係する」(パージャー, 1986, p. 22)ものとして一枚の画像に定着する。すなわち、写真はその画像のなかに撮影者の視点——それは時空間上の一点であり、一回きりの点である——をも記録するのである。まとめれば、第1表のように両者の差異を表すことができる。同じ表象媒体である写真と地図には、representationに相当する異なった日本語——表象、再現、代表——をあてることができる。写真は撮影者が目にした映像を再現し、地図は現実を分節化し記号に変換することによって現実を記号で代替させ表現する。

第1表 写真と地図の比較

	視 点	情 報	表象様式
写 真	主観的	客観的	再 現
地 図	不在 (客観的)	主観的	代 表

次に、「地と図」の英語による表題を検討してみよう。作者のあとがきによれば正井泰夫氏の翻訳によって英文が併記されているが、そのタイトルの英訳は Geo-Images とある。この造語は先に触れた Ó Tuathail (1994) による geo-graphy という表記と比較すると興味深い。地理写真は地理学とも区別され、その違いは graphy (記載法) と images (画像)⁴⁾ との違いである。これは表現形態の違いともいえる。地図を除けば、多くの部分を言葉で記載する地理学に対して、地理写真は画像によって地 (geo) を表現する試みといえる。言葉は単語という形で現実を分節化し、それらを規則に従って配列し、論理的に整合性を持って初めて意味を成す。それに対し、画像とは認識以前の状態である。写真による表現と解釈には大きな不確実性を伴うことも認識しておこう。

2) テキストとコンテキスト

地と図の關係は、より一般的な問題に拡張すればテキストとコンテキストの問題ともいえる。我々の社会科学的営為の多くが、何か特定の事象を理解したり説明することを目的としている。いわば、そこでの研究対象としての現象が図柄でありテキストである。そしてその現象を成り立たせている状況が素地であり、コンテキストである。

地理学史において、近年コンテクスチュアル・アプローチなるものが主張されている (Berdoulay, 1981; 野澤, 1992)。それは学問分野の歴史をその内的論理のみによって説明するのではなく、それが産み出される様々な状況を加味すべきであるという主張を含んでいる。Berdoulay (1981, p. 11) は、内的要因と外的要因とを厳格に区別することを戒めているが、こうしたアプローチはともすると地理学史という図柄を時代精神や社会的政治的状况 (特に制度) といった素地によって決定論的に説明することになりかねない。そして、そのような説明法——因果的説明法 (そこには原因と結果がある)——は個々の系統地理学においては一般的であったともいえる。

しかしながら、上述した「図と地」の關係、

そしてコンテキストという語をハイフンで区切ることで分かるように (con-text=テキストと共に)、テキストとコンテキストの関係もどちらか一方が欠けては成立しない関係である。このようにコンテキストの概念を問い直すと、我々は因果的な説明法を棄却し、より解釈学的なアプローチへと向かわざるを得ない。そうしたアプローチをとりあえずコンテクスチュアリスト・アプローチと呼んでおこう (Barnes and Curry, 1983; Buttner, 1993)。因果的説明法が原因や法則を目的とするのに対し、解釈学は意味作用に焦点を置く。すなわち、それはある現象がなぜ生じたのかということではなく、ある状況で生じた意味を問うのであり、それ故に現象が生じている社会一般、すなわちテキストを含めたコンテキストが問題となるのである。テキストとコンテキストの境界の設定はあくまでもその研究者の意識に関わる問題であるといえよう。例えば写真の場合、撮影者の狙った対象物 (図柄) 以外のコンテキストをフレームの範囲だけ画像として収めることとなるが、フレームという境界によってその外側に記録されない外部を創り出すことになる。

ここで思想史家ラカプラ (1989) の主張をみてみよう。ラカプラはテキスト重視の立場とコンテキスト重視の立場の両極を脱コンテキスト化と過剰コンテキスト化と呼ぶ。脱コンテキスト化とは、コンテキストを説明要因として決定論的に扱うことの拒絶であるが、そうした解釈にはコンテキスト上の知識を少なからず必要とし、「それが効果を持つのはコンテキストへの期待があればこそである」(ラカプラ, 1989, p. 170)。それに対し、過剰コンテキスト化においては、「テキストをその時代と場所の特殊性のなかに浸してしまうあまり、敏感な反応をとともう理解が妨げられ、過去と現在との相互作用が極度に制限される」(ラカプラ, 1989, p. 175)。ラカプラ (1989, p. 175) によれば、「必要なコンテキスト化と余分なコンテキスト化とを区別するために訴えることのできるような抽象的基準、そんなものは存在しない」。ラカプラ (1989, p. 169) の結論は、「コンテキストに出会うばあい、必ず特定のテキストないし実践を「媒介」としており、またコンテキストは

テキストという根拠にもとづいて再構築されねばならない」というものである。

IV 二分法的認識を越えて

1) 自然としての地、人間の営みとしての図

それでは、この作品のなかに作者の地理学的主張をみていくことにしよう。まず、作者にとっての地理学とは何か。「地表面にはさまざまな場所がある／この特色を考えることは地理学の重要な課題である／本書はこの目的に沿って写真を構成した」と作者は語る。そのような意図で構成された『地と図』の構成と内容は第2表に示したとおりである。いくつかの例外はあるが、構成写真の撮影場所のほとんどは日本国内であり、かつ国内全域に撮影地点が存在する。掲載写真は全てモノクロである。

先に筆者は「地と図」というタイトルについて検討したが、作者にとってこのタイトルには本書の結論が含意されていることが分かる。作者にとって地と図とは何か。「ここでいう「地」とは自然である／人間の手がほとんど加わらない場所である」(石井, 1989, p. 3)。そして、「人間の営みはさまざまな「地」にさまざまな「図」を描いていく／描かれる「図」それはそれぞれの場所に応じて／広大な自然の中に ごく小さく／あるいはまた／人工的なものだけで覆ってしまう／描かれる「図」それはむらやまちであり 生産の用地や交通施設である／さらに精神文化にかかわりのある営造物など」(石井, 1989, p. 11)。この主張は明らかに人間-環境関係を想起させるが、画像で提供することで決定論的な主張は薄く、後者が前者をどれほど規定しているかという判断は観賞者に託される。

自然と人的営為の関係性を地と図の関係として捉えるという主張⁵⁾を始め、この作品における作者のいくつかの主張は、写真によるモデルによって示されている (写真1)。これらのモデル写真は各章の扉に位置し、その後続くさまざまな地理写真はそのモデルを検証するという形を取っている。以下、モデルと実際の写真との関係について検討してみよう。

第2表 『地と図』の構成と内容

I. 地	撮影場所	頁数	写真数	内人物なし
モデルⅠ（「地」とは人間の手の加わらない自然）				
氷雪の大地	アラスカ	1	1	(1)
極高地	ヒマラヤ	2	1	(1)
活火山	有珠山	1	1	(1)
閉ざされた山	槍が岳	1	1	(1)
Ⅱ. 地と図				
モデルⅡの1（人間の手が加わった印としての「図」）				
山小屋	槍が岳	1	1	(1)
モデルⅡの2（必要な構成要素によるシステムとしての場所）				
農村	フランス・シャンパーニュ	1	1	(1)
畑	北海道・富良野	1	1	(1)
高原の農村	岡山・吉備高原	1	1	(1)
海辺を見る	日本各地の海岸地域	16	14	(8)
砂丘の開発	庄内砂丘	3	3	(2)
輪中の村	岐阜	6	7	(7)
焼畑を保存する人たち	石川・白山西山麓	7	8	(3)
開山祭のころ	上高地	6	8	(1)
雪国点描	長野・飯山線沿	10	12	(6)
秋山郷のこどもたち	長野・秋山郷	8	9	(3)
東山郷の在来作物	長野・上村	6	12	(7)
モデルⅡの3（一つの場所に共存する複数のシステム）				
畑と住宅	東京・世田谷	1	1	(0)
日向と日陰	埼玉・小鹿野	2	2	(2)
冬の上越国境	新潟・湯沢, 群馬・子持	2	2	(2)
高原野菜とペンションと	八ヶ岳東麓	14	21	(11)
二つの扇状地				
小さな京戸川扇状地	山梨・京戸川	7	8	(6)
大きな黒部川扇状地	富山・黒部川	9	11	(8)
モデルⅡの4（地と図の時間的変化）				
佃島	東京・佃島	1	1	(1)
熱海	静岡・熱海	2	4	(4)
新田のおもかげと都市化	武蔵野台地	8	10	(8)
新宿	東京・新宿	8	73	(64)
3つの廃坑	松尾, 宮田, 尾去沢	3	3	(2)
モデルⅡの5（一つのシステムによるもう一つのそのの圧倒）				
青山界隈	東京・青山	23	29	(13)

2) システムとしての場所

モデルⅡの2において、場所はシステムであると定義される（石井，1989，p.14）。地表面の建造物は人間生活の営みにとって必要な構成要素であり、その総体である場所はそうした構成要素の関係性からなるシステムである。これがこの作品の結論であり、出発点である。実際の写真はここでは棚上げにし、まずモデル写真から検討を加えてみよう。

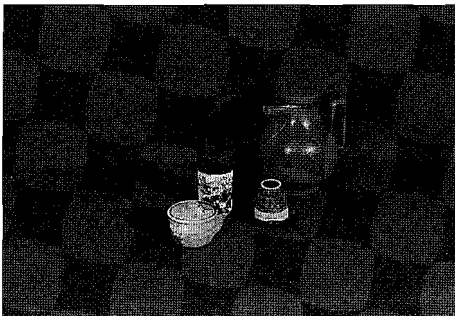
モデルⅡの2では、場所がシステムであることを説明するために、お茶を呑むという行為を成立させる要素をフレームに収め、その関係を示唆させる。このモデルに従えば、例えば農村空間において、場所とは農業という人間の営みにおいて、多様な条件を持つ土地（地としての自然）とそこに刻まれた人間の建造物（図としての人工物）の総体である。次にモデルⅡの3を見てみよう。ここで問題となるのは、言葉上「お茶を呑む」とい



モデル I



モデル IIの1



モデル IIの2



モデル IIの3



モデル IIの4



モデル IIの5

写真1 『地と図』において提出されるモデル写真

© 石井 實・朝倉書店, 1989

う同一の行為においても異なった様式のシステムが存在し、それらが同じ地の上に共存するという状態である。ついでモデルⅡの4では時間の経過に伴って、システムの構成要素の外観が変化することが示され、モデルⅡの5では、Ⅱの3で示された二つのシステムにおいて一方がもう一方を圧倒するという主張へと至る。

まず人間生活の原型としての集落が示され、しかしながら、場所の違いによって個々の要素は異なり代替は困難であることが示される。人間の移動やイノベーションの拡散の容易な現代社会においては、異なるシステムが共存することは希でなく、時に従来のものが新たに参入してきたものによって置き換えられる。このモデルを順に辿ってみると、こうした物語が想起される。この物語は、フォトジャーナリズムを支配する郷愁の観念を引き継いでいる。過去を記録するという写真の性質上、過去と現在の対比、そして過去の理想化は避けがたいものとなる。しかし、このことは単なるイデオロギー的な問題ではなく、システム概念の認識論上の問題でもある。これらのモデルによって説明されるシステム概念にはいくつかの限界がある。まず、個々のシステム要素をモノ（急須、ポット、湯呑）に代替させているため、明らかに構成要素が分節可能であること。お茶を呑むという行為を人間生活の比喩として用いているため、システムそのものの働きが目的論的であり、構成要素が行為の一部分を担うようなものであるために同時に機械論的なものであること。しかし、近年の新しいシステム論の勃興するなか、地理学内でも機械論的システム概念は再考を迫られている（水野，1995）。

さて、実際の写真を見てみよう。本作品において、システムの構成要素の総体としての場所を地理写真によって表現するには三つの方法が存在する。一つ目の方法はモデル写真と同様に、構成要素を一枚の写真のフレームに写し取ることである。この方法においては、システムの構成要素が写真のフレーム内に収まるほどローカルなものであるという限界が生じる。二つ目の方法とは「組写真」（名取，1963，p. 61）である。それはすなわち、一つの地域を数枚の写真の組み合わせによっ

て表現する方法であり、『地と図』においても多く用いられている。また、この方法の亜種として、ある共通性を持つ異なる地域の写真を組み合わせることによって両者の差異と類似性を示す方法もある。これが三つ目の方法である。

第一の方法における画像は概して鳥瞰的なものになる。それによって、より広範囲の構成要素を一枚の画像に収めることが可能になるが、それはフレームという限界を超えることはできない。すなわち、地理的現象を成立させる要素は必ずしも空間的に近接しているわけではない。言ってしまうえば、この方法における地理写真の目的は地理的現象の説明ではなく、まさに地域や場所を写し取ること、地域をそのものとして把握することである。画像としての記録は分節可能な要素の記録のみならず、分節不可能な要素、そして撮影者の意図せざるものの記録を含む。しかも、画像による主張にはヒエラルキーは存在しない。写されたものの全ては同価値にあり、価値づけるのは観賞者である。バルト（1985）が一枚の写真の些細な箇所にとりつかれるように、例えば秋山郷のストーブを囲んだ小学生の授業風景の写真（石井，1989，pp. 70～71）において筆者は、そのなかの一人の机の前にアルファベットで書かれた名前「Yamada hideki」に気を奪われる。なぜローマ字で書かれねばならないのか？ 国語の授業風景との不調和さ。撮影年から判断すると彼らはおそらく筆者と同世代であるが、今は何をしているのか？ こうしたことに思いを馳せる観賞者としての筆者。冬の雪国の説明のために用いられた写真から観賞者が学ぶことは、無味乾燥な機械論的なシステム論ではない。他の地域の写真に比して人の顔の表情が目立つ雪国で撮影されたこの組写真が訴えかけるのは、分節可能な要素とそれらの関係ではない。それはまずもって人々の表情であり、それが同時に記録された背景との調和（不調和）である。雪国そのものを象徴する人々の顔が図柄であり、フレーム内に同時に記録された全ては地柄である。

3) 地理写真の可能性

写真による地域や場所の表現は、地域や場所へのコンテクスチュアリスト・アプローチである。

写真は画像のみしか提示しない。そこには明白な因果関係は存在しない。一枚の写真は、その撮影者にとって自らが身をおいた時空間のなかの一断片であり、撮影者はその写真を見ることでその場の雰囲気を読み出すかもしれない。しかし、観賞者にとって写真は撮影の状況から切り離され、写真そのものの画像のみと向き合う。その場において、なぜその場面が撮影されたのか、また複数撮影したはずの写真のなかからなぜその写真が選択されたのか、こうしたことは撮影者のみが知ることである。その選択は上述したように、はるかに小さな確率によってなされたものである。いや、現実世界の出来事も小さな可能性と限りない偶然性によって成り立っている。

一方観賞者は、情報をひどく制限されているようであるがそうではない。むしろ、画像のみしか与えられないことが観賞行為を自由なものにする。画像に説明がなければ、観賞者が何を読み取ろうが撮影者とは関係ない。また、観賞者がどのような状況（観賞行為環境の状況と自らの精神と身体状況を含む）で観賞行為を行うかによっても読み取るものは違ってくる。また、被写体にとって撮影された状況はまさに一度きりのものであり、どのような状況が記録されるのかは非常に小さな確率で、しかもそれは撮影者との関係によって決定される。このように、撮影者と被写体と観賞者とが関係する場である一枚の写真は数多くの偶然性によって成り立っている（高橋、1996も参照）。

筆者の考える地理写真（写真による地理学⁶⁾の可能性とは以下のようなものである。二つの事例を見てみよう。まずは、サリー・マンの作品『イミューディエト・ファミリー』（1992年）である。この作品は彼女の3人の子ども（上から男、女、女）の裸体の様々な状況——それらは時に彼らに起こったハプニングであり、その他の多くはサリーが創り出した状況——を撮影したものである。彼女の作品は子どもらしさやセックス（ジェンダーも含む）に関する常識的観念への挑戦が顕著な主題であるが、サリーが生まれ育ち、現在も生活し、そして撮影の場としているアメリカ南部（ヴァージニア州レキシントン）も一つの主題として捉えられる。「私は子供たちの写真を撮って

いるのに、この土地の風景はしっかり中に入り込んでくるのです。私を捉えて放さない、なにかいわずいわず力発揮するのです」（ウッドワード、1993, p. 36）。筆者の考える地理写真のあり方の一つとしては、このマンの作品のようなもの、あるいは『地と図』のなかの雪国の写真のようなコンテクストとして地域なり場所が織り込まれてくるようなものである。

二つ目は、サイドとモアによる『アフター・ザ・ラスト・スカイ』（サイド・モア、1995）である。サイドはパレスチナ人批評家として、イスラム世界やパレスチナ人について数多くの発言をしてきているが、本書はジャン・モアという写真家によるパレスチナ人の写真84点（イスラエルから世界中にわたる）を通じたサイドによるパレスチナ人論であり、写真論である。それは田沼武能の写真を通じて川本三郎が東京の昭和30年代を語る試み（川本・田沼、1992）に一見似ているようであるがそうではない（成瀬、1995を参照）。支配的な民族論においては、その民族の存立の根拠を土地への結び付きや血筋に求めるが、パレスチナ人自体が土地を失った民族であり、サイドもそのような民族論とは無縁である。しかしながら、彼は自らをパレスチナ人であると、そしてパレスチナ人は実在すると公言する。自らの経験と祖母の過去物語、そしてモアの写真を辿りながら（成瀬、1996を参照）。

写真の多くは地理的である。地理写真とは写真の画像そのものの形式によって分類されるべき概念ではない。それは写真によって表現しようとする事柄のなかで、地理的な主張が一つの主題として含まれる作品である。しかもその主張は、従来の言葉と地図による地理学では不可能であった主張であって欲しい。その違いについては既に述べた。また同時に、「写真家は撮影した出来事を第三者に伝える報告者として自分を位置づけるのではなく、むしろ撮影している出来事に係わっている人たちのための記録者となることである。この違いは決定的だ」（バージャー、1993, p. 78）。第三者に伝える報告者としての役割は報道写真家に任せればよい。そのような役割を意識した作品は大抵イデオロギー的色彩を帯びる。

具体的な作品の構想まで本稿で提示することはできない。写真という画像による主張は、確たる事実を報告するという教育的なものであってはならない。確かに写真家が提供するものは紛れもない事実であるが、そこには観賞の自由がなくてはならない。そのことによって、観賞者が事実そのものを問い直し、作者とともに考える。地理写真家は地理批評家⁷⁾との対話を保ちながら主張をしていく、そのように望みたい。

素晴らしい『地と図』の続編の刊行を待ちながら。

本稿は、『地と図』を筆者に恵贈して下さった石井實氏に対する回答である。写真一般論については、筆者が1995年1月に提出した修士論文のなかに散在していた断片を編集したものである。写真1の転載に関して許可をいただいた、朝倉書店取締役社長朝倉邦造様と、転載のために特別に焼き付けをしていただいた石井實氏に感謝いたします。本稿の骨子は1996年度日本地理学会春季学術大会一般発表において発表した。

注

- 1) 例えば、2枚の空中写真の同じ撮影場所を重ね合わせて見る実体視という技術は、厳密に言えば僅かな撮影時間の差を持っている。
- 2) 初等、中等教育における地理の教科書においても、撮影時間と場所の詳細な情報を載せず紙面の多くの部分が写真で占められている。
- 3) 『新版 心理学事典』平凡社、p. 100。
- 4) image をカタカナ表記した日本語「イメージ」においては、内田(1987)や尾藤(1996)のように観念的な意味で用いられているが、こうした研究が明らかにしようとするものは非常に不明瞭なものである。ここでは、アルファベット表記上の意味、すなわちミッチェル(1992, p. 11)が「われわれは、絵画、彫像、光学的幻影、地図、図表、夢、幻覚、見世物、投影像、模様、記憶、そして観念すらもイメージと呼ぶ」というように、多様ではあるが物質的・観念的な画像としての意味で用いられていると考えてよいだろう。
- 5) 「図と地」の関係によって地理的空間を理解しようという同様の主張は、ノルベルグ＝シュルツ(1973, p. 56)による現象学的建築論のなかでも展開されている。
- 6) 上述したように写真による地理学的主張は因果論的説明法よりも解釈学に向いていると筆者は考える。

よって厳密に言えば、地理写真は写真による地理学というよりは地誌学に、最近の用法ではロカリティ研究とする方が適切であろう。

- 7) アンドレ・ケルテスのニューヨークの写真の研究対象とした Seamon (1990) は一つの試みである。個々の写真の分析は興味深い、論文の目的がハイデガーの現象学に依拠した人間—世界関係の探求であることは本稿の議論とは一致しない。

文 献

- 石井 實 (1989): 『地と図——地理の風景——』朝倉書店, 175 p.
- 内田順文 (1987): 地名・場所・場所イメージ——場所イメージの記号化に関する試論——. 人文地理, vol. 39, pp. 391~405.
- ウッドワード著, 森 百合子訳 (1993): サリー・マンの写真が気になる. みすず, no. 383, pp. 33~45.
- (Woodward, R. B. (1992): The disturbing photography of Sally Mann. *The New York Times Magazine*, September 27.)
- ヴァルンケ著, 福本義憲訳 (1996): 『政治的風景——自然の美術史——』法政大学出版局, 179+19 p.
- (Warnke, M. (1992): *Politische Landschaft: Zur Kunstgeschichte der Natur*. Carl Hanser Verlag, München.)
- 川本三郎著, 田沼武能写真 (1992): 『昭和30年東京ベルエポック』岩波書店, 94 p.
- 佐藤健二 (1994): 『風景の生産・風景の解放——メディアのアルケオロジー——』講談社, 258 p.
- 斎藤 毅 (1992): 日本の新しい風景美としてのサンゴ礁. サンゴ礁地域研究グループ編: 『熱い心の島——サンゴ礁の風土誌——』古今書院, pp. 252~266.
- サイド著, モア写真, 島 弘之訳 (1995): 『パレスチナとは何か』岩波書店, 269 p. (Said, E. W. with photographs by Mohr, J. (1986): *After the last sky: Palestinian lives*. Pantheon Books, New York.)
- ジジェク著, 松浦俊輔・小野木明恵訳 (1996): 『快樂の転移』青土社, 407+vi p. (Žižek, S. (1994): *The metastases of enjoyment: six essays on woman and causality*. Verso, London.)
- ソントグ著, 近藤耕人訳 (1979): 『写真論』晶文社, 221 p. (Sontag, S. (1977): *On photography*. Farrar, Straus and Giroux Inc., New York.)
- 高橋周平 (1996): 「写真集を読む」ということ. リテラール, no. 16, pp. 94~105.

- 名取洋之助 (1963)：『写真の読みかた』岩波書店，205 p.
- 成瀬 厚 (1995)：書評：川本三郎編・田沼武能写真：昭和30年東京ベルエポック。地理科学，vol. 50, pp. 214～215.
- 成瀬 厚 (1996)：書評：サイード著，モア写真，島弘之訳：パレスチナ人とは何か。地理学評論，vol. 69, pp. 849～850.
- 成瀬 厚 (1997)：レンズを通した世界秩序——世界の人々をテーマにした写真集の分析から——。人文地理，vol. 49, pp. 1～19.
- 野澤秀樹 (1992)：地理学史研究の方法——科学哲学・科学史・思想史との係わりにおいて——。人文地理，vol. 44, pp. 47～67.
- ノルベルグ＝シュルツ著，加藤邦夫訳 (1973)：『実存・空間・建築』鹿島出版会，236+12 p. (Norberg-Schulz, C. (1971): *Existence, space, and architecture*. Studio Vista, London.)
- バージャー著，伊藤俊治訳 (1986)：『イメージ——視覚とメディア——』PARCO 出版，263 p. (Berger, J. et al. (1972): *Ways of seeing*. Penguin Books, London.)
- バージャー著，笠原美智子訳 (1993)：『見るということ』白水社，246 p. (Berger, J. (1980): *About looking*. Penguin Books, London.)
- バルト著，花輪 光訳 (1985)：『明るい部屋』みすず書房，152+v p. (Barthes, R. (1980): *La chambre claire: note sur la photographie*. Gallimard, Seuil.)
- 尾藤章雄 (1996)：『都市の地域イメージ』大明堂，154 p.
- ブーアスティン著，星野郁美・後藤和彦訳 (1964)：『幻影の時代——マスコミが製造する事実——』東京創元社，340 p. (Boorstin, D. J. (1962): *The image: or, what happened to the American dream*. Atheneum, Chicago.)
- ベンヤミン著，田窪清秀・野村 修訳 (1970)：写真小史。佐々木基一編：『ヴァルター・ベンヤミン著作集 2 複製技術時代の芸術』晶文社，pp. 69～94. (Benjamin, W. (1955): *Werke* Band 2. Suhrkamp Verlag KG., Frankfurt.)
- 水野 勲 (1995)：自己組織化論による都市群システムのモデルとその応用——システム概念の再定義——。人文地理，vol. 47, pp. 155～173.
- ミッチェル著，鈴木 聡・藤巻 明訳 (1992)：『イコロジー——イメージ・テキスト・イデオロギー——』劉草書房，291+xx p. (Mitchell, W. J. T. (1986): *Iconology: image, text, ideology*. The University of Chicago Press, Chicago.)
- ラカプラ著，前川 裕訳 (1989)：『歴史と批評』平凡社，221 p. (LaCapra, D. (1985): *History & criticism*. Cornell University Press, New York.)
- 若林幹夫 (1995)：『地図の想像力』講談社，261 p.
- Barnes, T. and Curry, M. (1983): Towards a contextualist approach to geographical knowledge. *Transactions, Institute of British Geographers* N.S., vol. 8, pp. 467～482.
- Berdoulay, V. (1981): The contextual approach. Stodart, D. R. ed.: *Geography, ideology & social concern*. Basil Blackwell, Oxford, pp. 8～16.
- Buttimer, A. (1993): *Geography and human spirit*. The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 285 p.
- Cosgrove, D. (1994): Contested global visions: *One-World, Whole-Earth*, and the Apollo space photographs. *Annals of the Association of American Geographers*, vol. 84, pp. 270～294.
- Cosgrove, D. and Daniels, S. eds. (1988): *Iconography of landscape: essays on the symbolic representation, design and use of past environments*. Cambridge University Press, Cambridge, 318+ix p.
- Davis, T. (1992): Beyond the sacred and the profane: cultural landscape photography of America, 1930～1990. Franklin, W. and Steiner, M. eds.: *Mapping American culture*. University of Iowa Press, Iowa City, pp. 191～230.
- Ó Tuathail, G. (1994): (Dis)placing geopolitics: writing on the maps of global politics. *Environment and Planning D: Society and Space*, vol. 12, pp. 525～546.
- Seamon, D. (1990): Awareness and reunion: a phenomenology of the person-world relationship as portrayed in the New York photographs of André Kertész. Zonn, L. ed.: *Place images in media: portrayal, experience, and meaning*. Rowman & Littlefield Publishers, Inc., Meryland, pp. 31～61.
- Taylor, J. (1990): The alphabetic universe: photography and the picturesque landscape. Pugh, S. ed.: *Reading landscape: country-city-capital*. Manchester University Press, Manchester and New York, pp. 177～196.

(受付：1996年11月7日)

(受理：1997年3月11日)